2010.3.24 京都新聞朝刊 3面

京都まなびの系譜 探検家 —4

南米

大型調査隊が研究原点に

1968年12月。山本紀夫（66）＝国立民族学博物館名誉教授＝は、南米・アンデス高地を四輪駆動車で走っていた。京都大探検部のアンデス学術調査隊として、栽培植物の起源を探る旅だ。

路傍に気になる雑草が見えた。調べると葉の形や紫色の花がジャガイモそっくり。ジャガイモの野生種だ。40年あまりにわたって取り組む「ジャガイモとインカ帝国」研究のスタートだった。

山本は「探検大学」にあこがれて京大農学部に入学した。農林生物学科を選んだのも同じ理由。今西錦司や、栽培植物の起源研究から「照葉樹林文化」を提唱した中尾佐助（1916～1993）が先輩にいる。「そこに入れば探検に行けるだろうと…」。

しかし、海外にいけるチャンスは来ないまま、学年が進んだ。「卒論のテーマはマツタケで、左京区岩倉の山で調査した」。ところがマツタケが1本も出ない。枯れ葉に寝ころんでいるうち、アンデス行きを思い立つ。

「中尾さんの『栽培植物と農耕の起源』の一節を思い出し、栽培植物の原種を調べようと思った」

卒論を放りだし、準備し始めたところへ、同じ探検部からライバルが現れる。チリ・パタゴニアの計画を打ち出した安成哲三（62）＝名古屋大地球水循環研究センター教授＝らだ。結局、アンデス学術調査隊として統一し、アンデス高地とパタゴニアの2班が別々に行動することにした。

安成も、探検にあこがれて京大理学部に入学した。当初は山岳部に所属した。「しかし単なる山登りにはあきたらなくなった」。山岳部同期には同じ悩みを持つ仲間がいた。今西にあこがれ農学部に入った井上民二（1947～1997）もその一人。仲間で下宿に集まり、海外遠征を話し合った。

「パタゴニア探検は僕が言い出した」と安成。チャールズ・ダーウィンの「ビーグル号航海記」に登場する平原や氷河の荒涼とした風景が魅力。そろって探検部に移籍し、準備を始めた。

隊には、理学部大学院生で氷河を研究する井上治郎（1945～1991）も加わる。山岳部OBで京大学士山岳会（ACK）会員だった。「ジローさんは六甲中学・高校の山岳部の先輩で親しかった」（安成）。

アンデス学術調査隊は2班合わせて10人の大所帯。68年秋、学生たちは交通費を節約するため、貨物船に2人づつ分乗して南米に向かった。

隊員のその後を、先に紹介しよう。

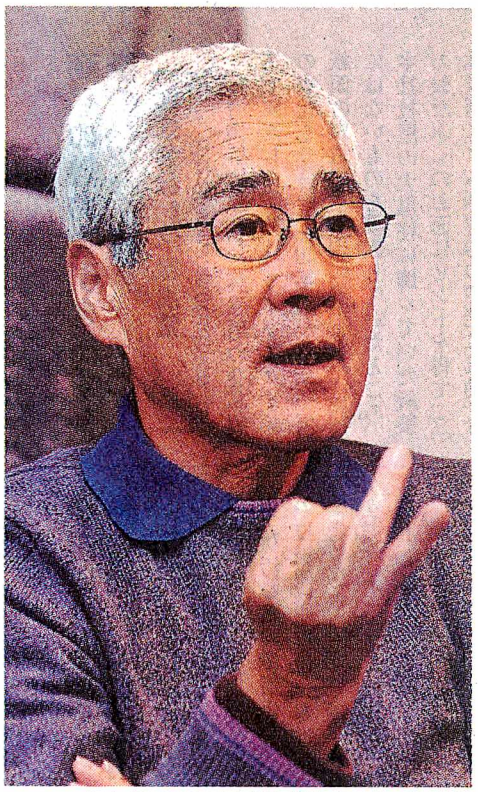
山本は毎年のようにアンデスに通い、ジャガイモの起源を研究した。国立民族学博物館の助手に採用され、インディオたちの調査も始めた。

安成は気象学を専攻。ヒマラヤを研究フィールドにし、アジアモンスーンを解明していった。国際的なプロジェクトを現在も進めている。

井上民二は京大生態学研究センター教授時代、ボルネオ島で高さ50メートルの熱帯林の林冠につり橋を巡らし、動植物の生態を調べるユニークなプロジェクトを実現させた。97年、現地に向かう航空機が墜落して亡くなる。

井上治郎は京大防災研究所助手になり、氷河の気象学を研究した。南極越冬隊にも加わる。91年、ACKの中国・梅里雪山登山で雪崩に遭い、他の京大隊員や中国隊員とともに亡くなった。

アンデス学術調査隊の帰国は69年春で、京大は大学紛争のさなか。山本は3カ月遅れて帰国したが、他の隊員はすでに運動の渦に飛び込んでいた。「アンデスにもう一度行こうと誘ったが、誰も関心を持たなかった」（文中敬称略）



山本紀夫氏（大阪府茨木市）＝撮影・辰己直史

安成哲三氏（名古屋市千種区・名古屋大）